

天童寺雜感

日本曹洞宗の祖と仰ぐ道元禪師が「本来本法性」の大疑を機縁として、菩提心を発して道を諸師に訪い、さらに貞応二年（一二二二）の二月、二十四歳に不退転の心をもたれ、求法のため京都を發つて入宋の途につかれた。

「未だ仏法僧の実帰を明らめず、徒らに名相の懷慄に滞れり。後に千光禪師の室に入りて、初めて臨済の宗風を聞き、今、全法師（明全和尚）に随うて、炎宋に入る、航海万里、幻身を波濤に任し……」〔宝慶記〕。

三月博多から商船に便乗し、四月に今の浙江省寧波に着かれたのである。爾來四年余の御修行の末、安貞元年（一二二七）の冬一生参学の大事を終り空手にして郷に還られた。文字通り「身心脱落、脱落身心」の仏道を極め一介の修行僧ではなく「弘法救生」の師として、入宋されて天童如浄禪師より曹洞の宗脈を伝えられ帰朝し、鎌倉時代の新興仏教の一つとして新たな宗風を挙げせられ、その流れが漸次に広がって遂には日本全土に普及し、

天童寺雜感（横井）

横井弘道

日本曹洞宗という一大宗団となつて、今日まで七百五十有余年脈々とその宗風が続いていることは万人の知るところである。

また禪師が示された『普勸坐禪儀・正法眼藏・学道用心集・永平清規』等々の教誨垂訓は、今日も曹洞宗門にとどまらず各分野の人々によつて関心を示され、常に人間が求めて止まない物的欲求と、精神的不安の状況の中にあつて常に明日への曙光と心の拠るべき糧が与えられている。

道元禪師の宗風を仰ぎ教誨垂訓を聴聞して深く帰依する人にとつては、今も尚、禪師の人としてのぬくもりと、人としての厳しさが感じられる。禪師はただ遠い過去の人ではなく、現実に己の心の中に生きる血の通つた嚴父であり、慈愛に満ちた母でもある。なるがゆえに嚴父や慈母を曙光の心の拠るべき糧として与えられたことのみにとどまらず、人としてのふれあいを求めて「永平寺」はもとより道元禪師・高祖様の生涯の行履に接したい心情は少なからず誰れもが望んで止まない心情ではないだろうか。

今回はからずも本学禅研究所（所長 田島柏堂博士）の主催する、愛知学院大学天童寺友好訪中国（团长 竹田学院院长）の一員に加わり中国浙江省の天童寺を訪ねることが出来た。もとより天童寺には前に述べたように行履にふれたい一人として、前々より限らない意欲は持っていたが、外交上の問題（昭和五十三年国交回復）もあり生涯の夢としてしか考えていなかったが――。

昭和五十六年七月二十六日大阪を発ち上海、杭州經由で一行三十二名、天台山国清寺に一泊、翌二十八日阿育王寺に参拝の後天童寺に着いたのである。寧波の町並みはずれ延々と広がる田園地帯を走り抜け、阿育王寺から小さな峠道を越えるともう天童の里である。我々が中国に着いて先ず最初に感じたことは生活水準の差異であった。新しい中国が辿る道は十一億からなる人口をいかにささえるか。即ち食糧問題を解決し、そのうえに漸次近代化を計ることだろう。したがって生活水準は日本との間にかんりの隔りがあることを深く感じたものである。しかし、農業政策は目を見はるものがあり、広い大陸で大変な事業が立派に成されていることをつくづく感じたのである。杭州から見えてきた山並は山頂に至る迄伐採が行なわれ、赤茶けた山肌を現に出していた。そんな風景も天童の門前迄来ると一変し、樹木が茂り背後には山が重なり、千古の想いをとどめるかのよう高くそびえ立つ松並樹、その間に三門が見え隠れする。文化大革命により古来よりの文化財が破壊されたり、落書きに等しい文字を道中にかいま見て来た我々

にとっては、三門の風情は心を和ませてくれた。「これでいいのだ」千七百年に満ちようとしている天童寺の歴史は、七百五十年余前の道元禪師が登られた時も、今我々一行が限りなく道元の路を訪ねて来た時も、その姿のままであった時に初めて道元禪師の行履にふれ天童の真の姿をかいま見ることが出来るのである。中国は新しく変った。しかし、天童寺だけは変わってほしくない、昔のままの姿であってこそ天童寺は宗祖をして我々の心の中に生き続けるのである。

我々は国清寺に一泊し、さらに阿育王寺を訪れ、いささか中国の仏教が風化し遺蹟化の様相を呈してゆくのではないだろうかという危惧の念を抱かざるを得なかった。我々は天童寺だけはそうあってはならないことを期待した。もし、風化し遺蹟化してしまった天童寺であったなら、今ここ迄来ることよりも禪師の教誨垂訓の中での昔のままの天童寺として心の中で生き続けた方が幸せであっただろう。宗風を仰ぐ一行の誰れもがその葛藤を抱きながら一の門、二の門と進む。それにつれて昂奮も漂っていたのである。ついに来た天童寺へ〆そして、天童寺はまぎれもなく生きていた、今も尚昔の姿で栄々として。道元禪師を祖と仰ぐ誰れもがこの天童寺を祖廟と思ひ、また、親しんだ。しかし、それは遠い国でもあり、生さぬ旅路でもあったが、放生池の向うに「東南仏国」と大書された天童の壁を見たときは、無上の感激であった。おそらく青年道元禪師におかれても「道元幼年より苦

提心を発し、本国に在って道を諸師に訪ね、いささか因果の所由を識れり、しかもかくの如くなりといえども、未だ仏法僧の実帰を明らめず、……〔『宝慶記』〕の通り、求法の道をこの広い大陸中国に求め天童寺に到った時の心境は深い感激であったと思われる。我々は天童寺に立ったのである。宗祖の心情をいくばくか汲まんとして。

禅師が寧波の港に着かれて以来、天童寺に掛錫されたのは七月である。と記録されている。我々もまた、木立の茂る真夏の七月の旅となったのである。

師資別離の遺誠「……：国王大臣に近づくことなけれ。ただ深山幽谷に居りて一箇年箇を接得し、吾が宗を断絶致さしむることなけれ」の通り、天童寺は永平寺が志比の山に抱かれているが如く、太白の山に優しく抱かれている。越前平野を縫って永平寺に至る山辺の道や田も、天童寺に至る道のりの風情も違わぬ風情があった。道元禅師の心の中には、いかに天童寺の響きが深く渡っているかをしみじみと思つたのである。壮大な中国風堂塔伽藍と規模の大きい色彩豊かな天童の仏さま達、とりわけ羅漢さまとの出合いは誰れの眼にもドラマチックに映つたであろう。諸堂拝観を案内されながら、一つ一つ「東南仏国」の舞台で繰り広げられた多くの僧達の歴史の重みを肌にした。夕暮れと共にまた、静寂も深まってゆく太白山系に七月の太陽が没す。三十二名の一行が一夜を送ることは静寂の中にもそれなりの「ザワメキ」はある

天童寺雑感（横井）

が、壮大な伽藍はその何もかも吸い込んでゆくようであった。その昔は一千人を越す僧達がこの天童寺で修行をしたといわれる。今はその面影もなく六十人程の僧が弁道に励んでいる。中国はこれから仏教とどんな形で取り組んでゆくのだろうか。それは生かす為にか、形骸化して遺物の道を選ぶのか、私には解らない。仏教興隆の大宋国が、幾多の歴史の変遷を経て日本仏教より衰退したことは、中国の思想的背景が在ったにせよ悲しいことである。今その修復も着々と進み、国清寺、阿育王寺等々行く先々で復元作業を目の当たりに見て、再び民衆の中に心の拠所として溶け込んでゆくことを念じたい。

今も昔も変らない月が山の頂を嘗めるように登って来た。道元禅師もこの月を眺められただろう。天童寺に在っては谿声山色は日本と少しも変らない。「中国はこんなに近くなってしまったのだナー」としみじみと禅師のご苦勞を思いながら感傷に浸った。暗くなった山内の大きな伽藍が自分にのしかかってくるようでもあった。そして孤雲名月に照らされたその伽藍の何処からか、七百有余年経った今も若い道元禅師さまが漂々として出て来られるよう気がしてならなかった。思いきり「道元さま」と呼びかけてみたい衝動にかられてしまったのは私一人であっただろうか。天童寺にたとえ一夜とて開枕の機を得たことはすぎたる喜びであった。

道元禅師が長くて短い四年余月と、遠くて近い中国、東南の仏国

に真箇求法のため入宋され、無際了派の会下に投じ、さらに、宋土の禅風に親しみながら後、如浄禅師と師資契合し、寒暑互いに移るなか寝食を忘れ、只管に弁道されたことは文字通り粉骨碎身のご修行であった。天童寺参拝の勝縁を得たことは「身心脱落、脱落身心」の大悟の道を、力強く後日の訓誡となつて示された『正法眼蔵』等々日本曹洞宗風の原点に浴した思ひであつた。

翌朝三時振鈴、深閑とした中で朝課に随喜。中国僧の読経はリズムとなつて、いやむしる哀調を帯びたかのような……。次いで訪中団、竹田団長導師のもと、一行法乳の慈恩を謝し読経。

団長法語

今月今日日本国愛知学院大学参禅会勝縁ヲ得テ天童山ニ拝登ス、往古、日本曹洞宗高祖永平道元大和尚禅師、渾身ヲ呈露シテ身心脱落脱落身心 天童如浄大和尚禅師是ヲ聴許即刻印可証明、剩自ラノ宗風ヲ伝エ汝日本ニ帰リ此ノ宗風ヲ宜掲セヨト 此ノ師資相承ノ消息七百余年ヲ経リ今日此ノ場、是ノ情ニ於テ野納、来機会衆、感慨無量、謹シテ天童如浄大和尚禅師光伴ニ永平道元大和尚禅師ノ為ニ奉リ上慈恩ニ酬フ要ス。

即今 只管打坐、正法眼ヲ開キ、喫茶喫飯一味ノ禅ヲ掬ス。

古天童に朝露を踏み竹林を縫つて礼し、多年の念願であつた天童寺への参拝を終え、惜別の情禁じがたきを断ち帰路に……。今尚人なつげそうに見送られた天童寺の僧達の合掌柔和な姿が臉に浮んでくる。

寧波で道元禅師上陸の地点と思われる港を一覧し、杭州に向かう途中、短い時間であつたが黒雲が太白山の方から湧いて来て、たちまち大粒の雨となつた。別離の雨のように思えてならなかつた。途中紹興、杭州、蘇州、上海を経て日本に帰つたのは八月二日であつた。

思うに、天童寺友好訪中団の一員として参加させて頂き、所感を述べる機会に浴したことを光榮に思う。宗祖を仰ぐ人々とはいへ、二度とこの三十二名が揃つて道元禅師の行履天童寺を訪れることは我々の生涯を通じてもうないであろう。団長先生には御高齡にもかかわらずお元気で、そして全員無事目的を円成したことを喜ぶと共に、第三班各位のご協力に厚くお礼を申し上げる次第である。